

安全運転の考え方

その指導法・管理法



事故なき社会 研究担当取締役
九州大学名誉教授

松永 勝也氏

安全運転の指導内容に「つけた運転」や「ゆとり」を付けた運転」や「ゆとり」を付けた運転」が具体的にどのような運転法と、「道路交通法の順守」、「ゆとりのある運転」、「安全な車間距離の保持」、「注意しての運転」などが記載されている。

生存本能が運転手を急かす

しかし、例えば、道路交通法の基本的な内容である「制限速度」の存在や「一時停止指定交差点」などは、全ての運転者が知っている。知っているが、完全に守られていないのが現状といえる。「気

知っているが実行は困難

第1回

る所に到達し獲得する必
要がある。すなわち、生存
し続けるには、他者より
も先行する必要がある。
この行為は、生存する上
では必須であり、また、
われわれの先祖が繰り返
し行ってきた故に、われ

みに対し不快感が生じた
り、攻撃心が生じるのは
この本能によるものと考
えられる。この本能によ
る先行行動は、協力関係
が成立していない環境で
は、方々で散見される。
一方で、食料を確実に
獲得できる保証のない
環境で生き残るには、で
きるだけ体力の消耗を
少なくする必要がある。
このようにことから、必
要ではないと見なし得る
行動は省略するととも
に、できるだけ目的地に
早く到着し、体力消耗を
少なくするような選択が
なされるようになったと
考えられる（「省体力
本能」）。

人間のこの行動衝動
は、自動車社会でも出現
しているといえる。他者
よりも先行しようとし
て、あるいは、目的地に
できるだけ早く到着しよ
うとして、制限速度を無
視した運転、できるだけ
停止しない運転が出現し

衝突発生条件（車間距離が停止距離よりも短い時に衝突は発生する）



ていけるとみることができ
る。しかし、先行本能や
省体力本能は自動車社会
では生存を有利にしな
い。社会的に自動車利用
の経験が積み重ねられる
に従い、先急ぎの危険性
と非効率性を感じ取り、
先急ぎ運転を抑制する人
もあらうためには、人が持
つ先行本能と省体力本能
による運転が自動車社会
では生存を有利にしない
ことを、運転者が納得で
きるように啓発すること
が必要になる。

が徐々に増えている。一は、自動車の運転事故を
九五〇年代に散見された「CRASH」（破壊の発生
「神風運転」は最近注目される衝突）または「CO
LLISION」（衝突）と表
現することが多い。衝突
を防止できる運転法を解
明すれば、これらの効果
的防止法が明らかになる
だろう。

図に示すように、自動
車運転での衝突は、衝突
可能性のある物体（人、
車、建造物など）までの
距離（進行方向空間距
離、または、車間距離）
が停止距離よりも短い場
合に発生する。従って、
安全運転とは、停止距離
よりも長い車間距離（ま
たは、進行方向空間距離）
を保持しての運転といえ
る。次回から、安全運転
の積極的な実行を阻害す
る要因、自動車運転事故
の発生メカニズム、安全
運転の考え方、安全運転
の教育指導法、安全運転
の向上させ、持続させ
るための管理法などに関
する具体的な述べる。

衝突を回避し 交通事故防止

現実には発生している最
も多い事故は、警察庁の
統計にはない物損事故
だろう。死傷事故とし
て多く発生しているの
は、順に、追突事故、出
合い頭の衝突事故であ
る。従って、事故防止で
は、まず、物損事故、追
突事故、出合い頭の衝突
事故を防止することが
必要といえよう。英語で

松永 勝也氏（まつなが かつや） 昭和16
年生まれ、74歳。長崎県出身。47年九大院文学
研究科博士課程修了。平成8年同大院システム
情報科学研究科教授。24年事故なき社会研究担
当取締役。26年安全運転推進協会代表理事。